

惣作遺跡（第2次）発掘調査報告

～ 三重県津市殿村所在 ～

2002年3月

三重県埋蔵文化財センター

序

惣作遺跡は三重県のほぼ中央に位置する津市殿村に所在します。三重県の県庁所在地である津市は、伊勢湾や鈴鹿山脈の豊かな自然環境と温暖な気候にも恵まれ、古来より多くの遺跡が営まれてきました。特に安濃川流域には、弥生時代の中心集落である納所遺跡や、6世紀から7世紀の古墳400基以上からなる群集墳などがあり、当時の文化の一端を見ることができます。

今回報告します惣作遺跡は、安濃川中流域右岸に位置し、平成12年度二級河川安濃川（三泗川工区）基幹河川改修工事に伴って調査を行ったものです。この地域の発掘調査は、最近では一般国道23号中勢道路建設や県営ほ場整備事業に伴い、数年にわたって行われており、数々の調査成果をあげてまいりました。今回の発掘調査でも新たな発見があり、この地域の歴史的な重要性が改めて感じられるものであります。しかし、一方で重要な遺跡が記録保存という形でしか残せないことは、まことに残念というほかありません。これまでに得られた成果をどのように活用していくかが、わたくしどもの今後の重要な課題であると考えております。

調査にあたっては、地元の方々をはじめ、三重県県土整備部河川課、津地方県民局津建設部、津市教育委員会などの関係諸機関から多大なご協力と暖かいご配慮を頂きました。文末になりましたが心より厚く御礼申し上げます。

2002年3月

三重県埋蔵文化財センター
所長 桂川 哲

例 言

- 1 本書は、三重県津市殿村に所在する惣作遺跡の第2次発掘調査にかかる報告書である。
- 2 本遺跡の調査は平成12年度二級河川安濃川（三四川工区）基幹河川改修工事に伴い、三重県教育委員会が三重県県土整備部から経費の執行委任を受けて実施した。
- 3 平成12年度調査および整理は次の体制により実施した。

調査主体	三重県教育委員会
調査担当	三重県埋蔵文化財センター 調査第一課
	主事 柴山 圭子
	技術補助員 山岡 奈美恵
	土工担当 (財)三重県農業開発公社
調査期間	平成12年11月27日～平成13年1月23日
調査面積	400㎡
- 4 調査にあたっては、地元の方々をはじめ、三重県県土整備部河川課、津地方県民局津建設部、津市教育委員会からの協力を得た。
- 5 報告書作成にあたっては、上村安生氏（三重県史編纂室）、伊藤裕偉氏（斎宮歴史博物館）から有益な御教示を得た。
- 6 当報告書の作成業務は、三重県埋蔵文化財センター調査第一課および資料普及グループが行った。また、本文の執筆・編集・写真撮影は柴山が行った。
- 7 本書の方位は、国土調査法の第VI座標系を基準とする座標北を用いた。
- 8 挿図と写真図版の遺物番号は、実測図の番号と対応している。なお、写真図版は縮尺不同である。
- 9 本報告書での用語は、以下のとおり統一した。

わん	「椀」「碗」があるが、「椀」を用いた。
つき	「杯」「坏」があるが、「杯」を用いた。
- 10 本報告書での遺構番号は通番となっている。また、番号の頭には、見た目の性格によって以下の略記号を付けた。

SD：溝	SK：土坑	SB：掘立柱建物
pit：ピット、柱穴		
- 11 当発掘調査の記録および出土遺物は、三重県埋蔵文化財センターで保管している。
- 12 スキャニングによるデータ取り込みのため若干のひずみが生じています。各図の縮尺率は、スケールバーを参照ください。

本文目次

I 前 言	1
II 位置と歴史的環境	2
III 調査の成果～層位と遺構～	7
IV 調査の成果～出土遺物～	11
V 調査のまとめ	14

挿 図 目 次

第 1 図 遺跡位置図	2
第 2 図 遺跡地形図	3
第 3 図 土層断面図	4
第 4 図 遺構平面図	5～6
第 5 図 土層断面図	7
第 6 図 SK80・SB79実測図	9
第 7 図 SK69実測図	10
第 8 図 出土遺物実測図（石器）	11
第 9 図 出土遺物実測図（土器）	12

表 目 次

第 1 表 遺構一覧表	8
第 2 表 出土遺物観察表（石器）	13
第 3 表 出土遺物観察表（土器）	13

写 真 目 次

図版 1 調査前風景・調査区全景	15
図版 2 調査前風景・調査区全景	16
図版 3 SK69出土状況・SD74, SD75	17
図版 4 SD76, SK80ほか・SB79	18

I 前 言

1 調査の契機

今回の発掘調査は、平成12年度二級河川安濃川（三泗川工区）基幹河川改修工事に伴い実施した。惣作遺跡は、津市遺跡番号827の周知の遺跡である。当遺跡では、同年度に県営ほ場整備事業（津中部地区）に伴い、発掘調査が行われた^①。今回の調査が当遺跡の第2次調査となる。調査に先立ち、平成11年度に範囲確認調査を実施した。その結果、事業予定地の72,000㎡については遺構の存在が確認された。これを受けて、県土整備部河川課と文化財保護の協議を重ね、その結果工事により遺跡が破壊される400㎡について本調査を実施することになった。

2 調査の経過

(1) 調査経過概要

調査期間は平成12年11月27日～平成13年1月23日である。詳細については「調査日誌（抄）」を参照されたい。

なお、時には霜が降りるような寒い日が続くなか、調査にご協力いただいた作業員の方々のご芳名をここに記し、感謝の意を表する。

池村 治、池村久寿子、池村照子、杉田百合子、
館 正志、田中正次、矢代せつ子

（五十音順、敬称略）

(2) 調査日誌（抄）

12月6日 表土除去開始。溝、土坑確認。
12月11日 作業員スタート。遺構検出、掘削。
遺構・遺物とも少ない。
12月12日 調査区西部（L字部分）の清掃・写真撮影。
12月13日 調査区西部（L字部分）の遺構平面実測（平板）・土層実測。
12月14日 調査区西部（L字部分）の下層確認。遺構なし。
遺構検出。d16～d19、d24～d25に遺構集中する。
12月15日 遺構掘削。d18付近に掘立柱建物確認。
遺構検出終了。

12月19日 遺構掘削。SD67個別写真撮影。
SD74から弥生土器壺の底部など出土する。
12月20日 遺構掘削。SD74など個別写真撮影。
SD67出土状況図実測。遺物取り上げ。
12月26日 遺構個別写真撮影・出土状況図実測。
今年の現場作業本日まで。
1月9日 2001年現場初日に降雨。作業中止。
1月12日 調査区清掃、写真撮影。
1月15日 寒さに震えながら土層実測。
1月16日 調査区遺構平面実測。（1/20、1/50）
1月17日 下層確認調査。遺構なし。
1月18日 道具撤収。
1月23日 河川課に引渡し。調査終了。

3 調査の方法

表土掘削については重機で行った。それ以外は人力による掘削である。

今回の調査では、調査区内を4m四方の柵目で区切ることによって、小地区を設定した。ただし設定は、国土座標とは無関係である。

調査区の平面図は遺構密度により1/100、1/50、1/20で、土層断面図は1/20で作成した。また、出土遺物を伴う遺構については、1/10で作成した。

4 文化財保護法等にかかる諸通知

文化財保護法（以下、「法」）等にかかる諸通知は、以下により行っている。

・法に基づく三重県文化財保護条例第48条第1項（県教育長宛）

平成12年5月29日付農基第320号

・法第58条の2第1項（県教育長宛）

平成12年11月30日付教生第1036号

・遺失物法にかかる文化財発見・認定通知（津警察署長宛）

平成13年3月5日付教生第229-16号（県教育長通知）

II 位置と歴史的環境

1 位置

惣作遺跡は、津市殿村に所在する。当遺跡は安濃川中流域右岸、標高約7～8mの自然堤防上に位置する。安濃川は、鈴鹿山脈の南部に位置する錫丈ヶ岳付近に源を發し、下流域に南北幅約3km程の肥沃な沖積平野を形成し、津市島崎町付近で伊勢湾に注ぐ。

当遺跡東方には、国道23号中勢道路建設予定地があり、この事業に伴って近年発掘調査が行われてきている。また、惣作遺跡付近の安濃川右岸は、条里

制の名残をよく留めていたところであったが、ここ数年にわたり、県営ほ場整備事業も進められてきている。惣作遺跡の第1次調査は、この事業の平成12年度分に伴って行われたものである。

2 歴史的環境

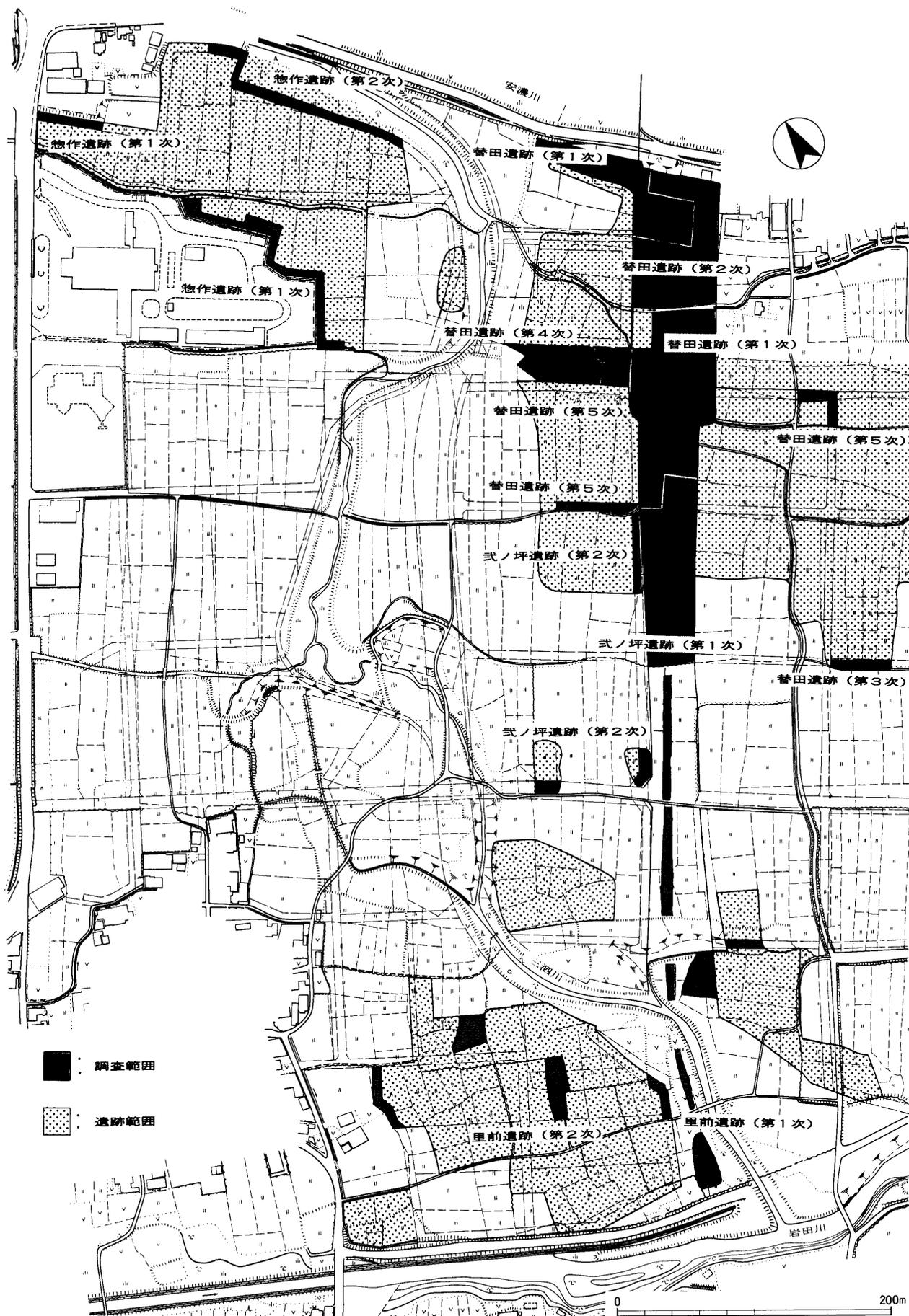
惣作遺跡の歴史的環境については、『惣作遺跡（第1次）発掘調査報告』⁹⁾、『一般国道23号中勢道路建設事業に伴う位田遺跡発掘調査報告』⁸⁾等に詳細な記述があるので、それを参照されたい。



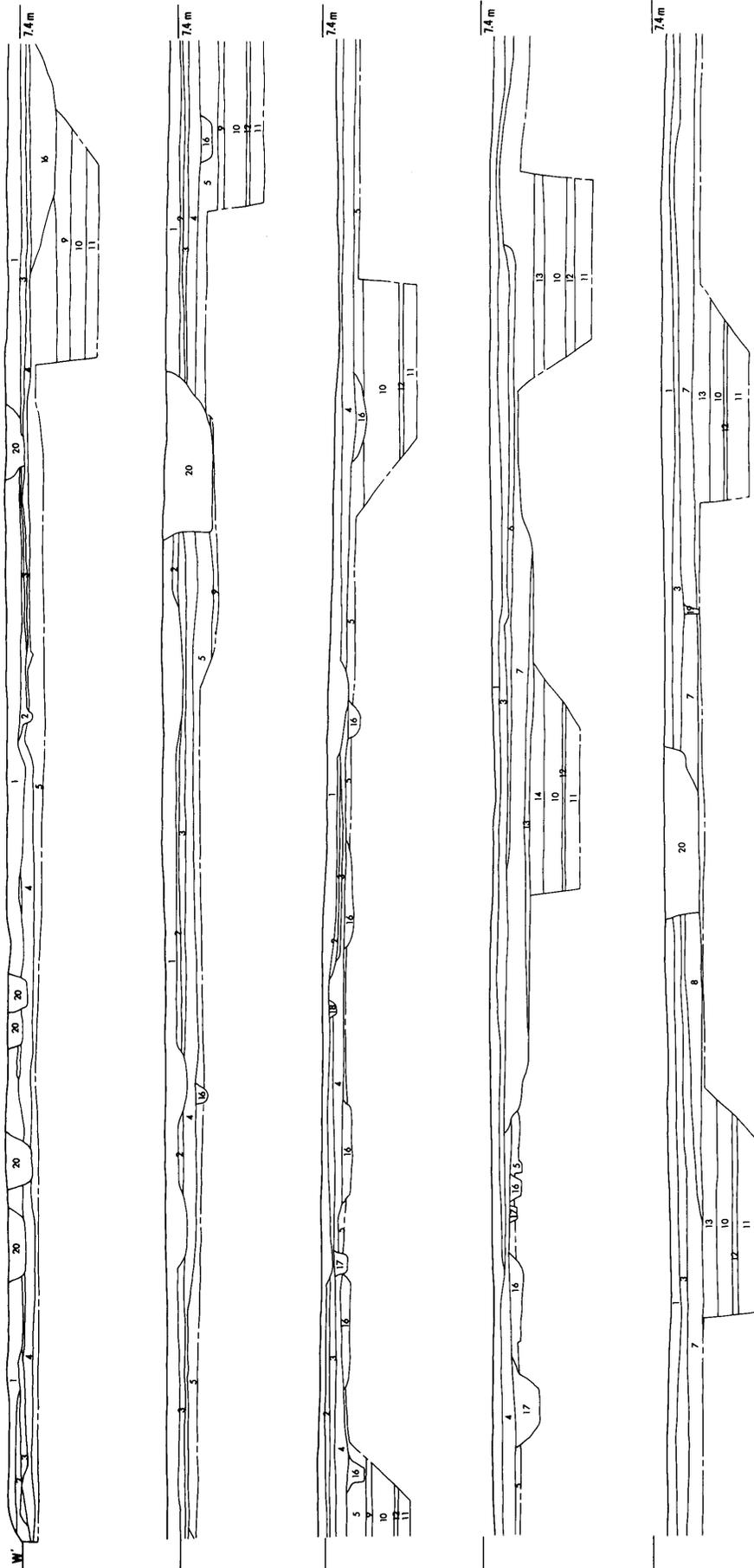
- | | | |
|---------|-----------|----------|
| 1 惣作遺跡 | 10 平栄遺跡 | 19 蔵田遺跡 |
| 2 替田遺跡 | 11 稲葉古墳群 | 20 松ノ木遺跡 |
| 3 式の坪遺跡 | 12 上村遺跡 | 21 太田遺跡 |
| 4 里前遺跡 | 13 鎌切古墳群 | 22 森山遺跡 |
| 5 梁瀬遺跡 | 14 おこし古墳群 | 23 宮ノ前遺跡 |
| 6 立花堂遺跡 | 15 名塚古墳群 | 24 納所遺跡 |
| 7 野田古墳群 | 16 神戸古墳 | 25 神戸遺跡 |
| 8 柳谷遺跡 | 17 西垣内古墳 | |
| 9 大ヶ瀬遺跡 | 18 位田遺跡 | |

第1図 遺跡位置図（1：50,000）

国土地理院『津東部』『津西部』（1：25,000）から



第2図 遺跡地形図 (1 : 4,000)

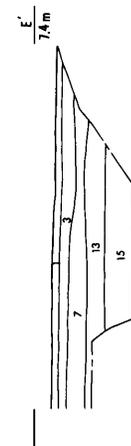


14 10YR 6/2 灰黄褐色砂 (小石まじり) に 7.5YR 5/8 明褐色粘質土ブロック混

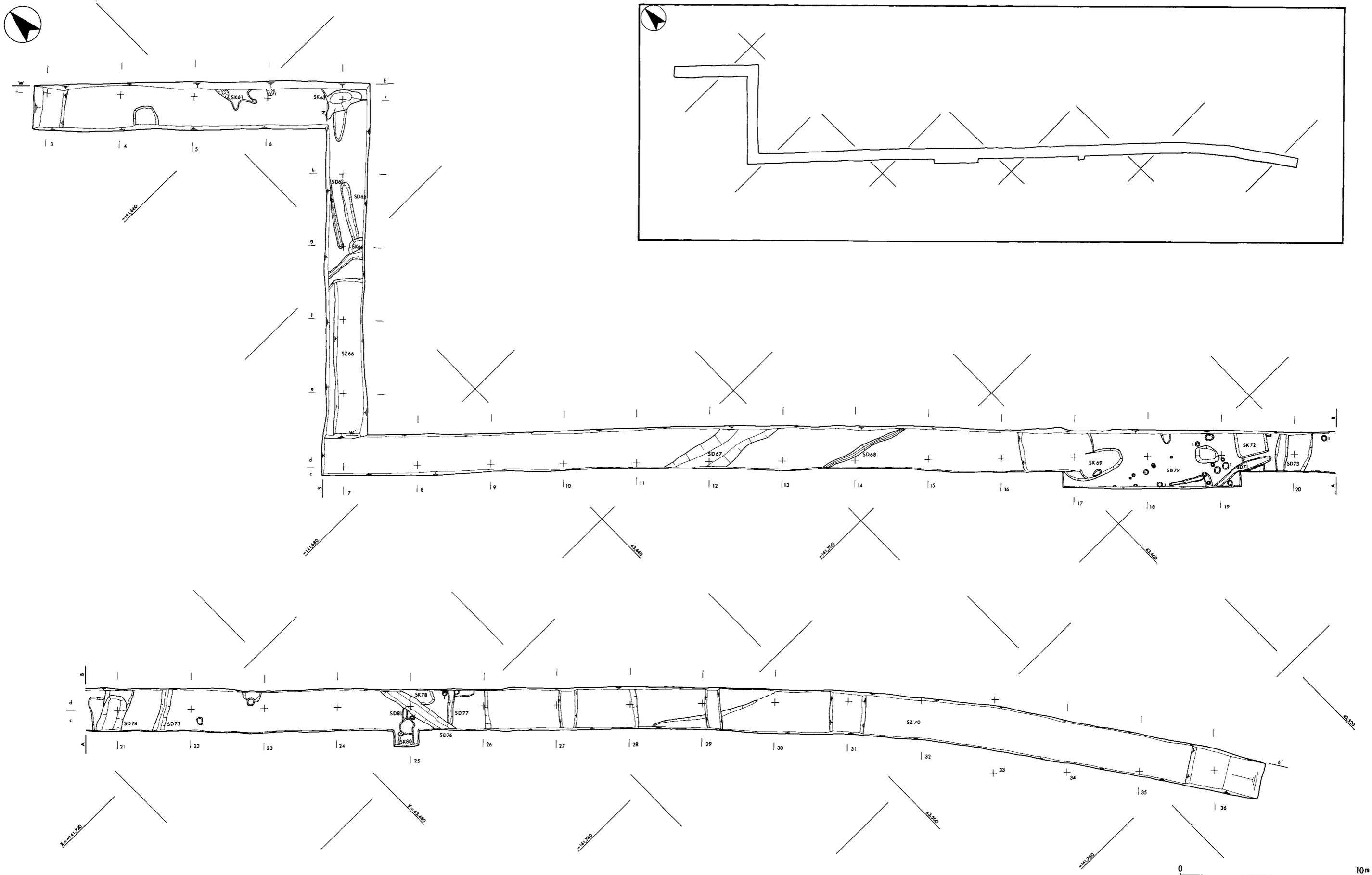
- 15 7.5YR 4/6 褐色砂質土
- 16 7.5YR 4/2 灰褐色シルト
- 17 5Y 5/1 灰色粘質土
- 18 7.5Y 4/1 灰色シルト
- 19 7.5YR 2/2 黒褐色土
- 20 カクラン

1 7.5YR 3/2 黒褐色土 (表土)

- 2 N 3/0 暗灰色土
- 3 7.5YR 5/1 褐灰色砂質土
- 4 7.5YR 5/3 にぶい褐色土
- 5 7.5YR 6/8 褐色シルト
- 6 10YR 4/2 灰黄褐色砂質土 に 7.5YR 5/6 明褐色シルトブロック混
- 7 10YR 5/2 灰黄褐色砂質土
- 8 7に 7.5YR 6/3 にぶい褐色粘質土ブロック混
- 9 5YR 4/4 にぶい赤褐色シルト
- 10 10YR 4/1 褐灰色シルト
- 11 10B6 3/1 暗黄灰色砂 に 2.5Y 6/6 明黄褐色土ブロック混
- 12 N 4/0 暗灰色シルト
- 13 10YR 5/1 褐灰色砂質土



第3図 土層断面図 (1:100)



第4図 遺構平面図 (1:200)

Ⅲ 調査の成果 ～層位と遺構～

1 基本層序

調査区は、安濃川中流域の右岸、標高約7mのところに位置する。安濃川水系三泗川の自然堤防上である。調査区西部は遺構も少なく後世の攪乱を多く受けており、層序も安定しない。それ以外の基本層序は、第1層が黒褐色の表土、第2層が暗灰色土、第3層が褐灰色砂質土、第4層がにぶい褐色土、第5層が橙色シルトとなり、この第5層上面を検出面とした。なお、第2層と第3層については所々で削平され、確認できない。

第5層から下は、場所により若干の相違は見られるが、概ね標高6m前後で砂が確認され、東部に行くほど低くなる。

2 遺構

今回の調査で検出した遺構は、弥生時代中期のものが主である。ここでは主な遺構について概述する。溝 SD67 調査区中央北寄りで検出した遺構である。東西方向に走るもので、両端が調査区外へと延びている。幅約1.8m、検出面からの深さ約0.3mで、肩から緩やかに底部へと落ちる形状である。

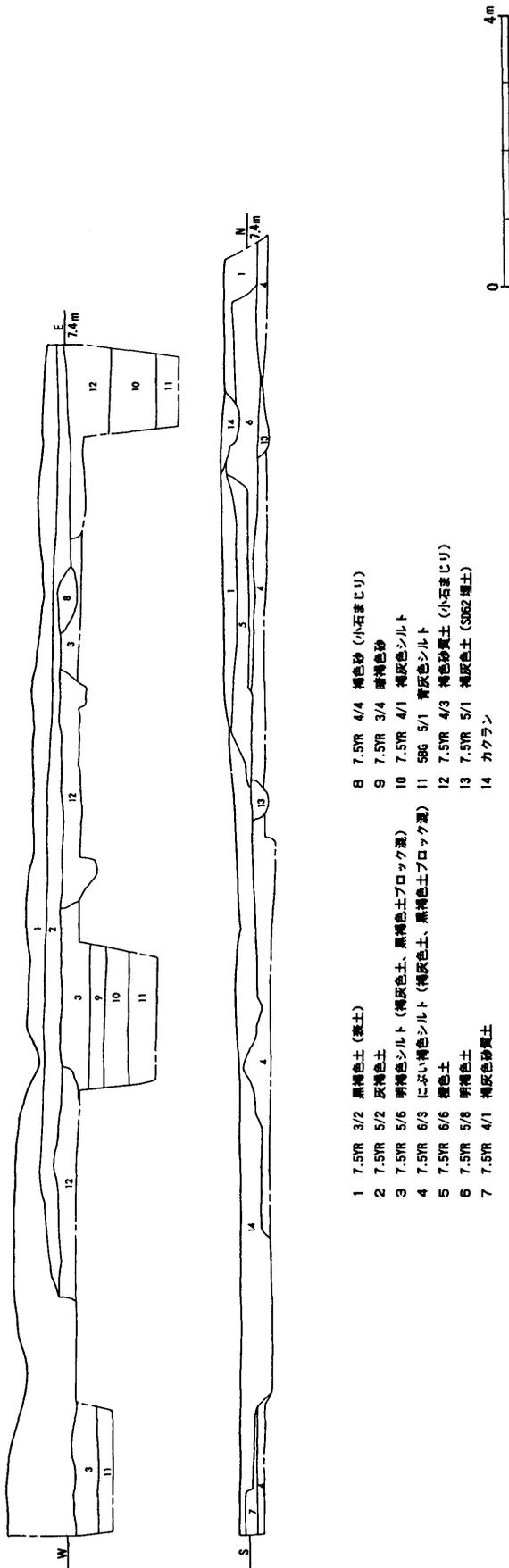
埋土中からは弥生時代中期の壺や甕（17～21）が出土している。

土坑 SK69（第7図） 調査区中央北寄りで検出した遺構である。北東部がカクランによって削平されているが、平面形は長軸約3.2m、短軸約1.4mの長楕円形を呈する。検出面からの深さは約0.25m程である。埋土には多量の炭化物が混入しているが、骨片などは確認できなかった。

出土遺物は弥生時代中期の壺や甕（8～10）である。全体的に形が復元できるものが少なく、破片が多い。

落ち込み SZ70 調査区中央南寄りから調査区南端部にかけて検出したものである。埋土は灰黄褐色砂質土、その下に褐灰色砂質土、粘質土混じりの砂と続く。今回の調査区でこのような埋土はここだけである。

出土遺物は、灰釉陶器や山茶碗などである。旧河道であると思われる。



第5図 土層断面図 (1:100)

溝 SD74 調査区中央部で検出した遺構である。北東から南西方向の溝で、南西部は一段下がっている。幅約1.2m、検出面からの深さは深いところで約0.2mである。

掘立柱建物 SB79 (第6図) 調査区中央、SK69のすぐ南で検出した遺構である。東西棟で東西3間以上、南北2間以上の建物である。主軸の方向はN76°Wである。

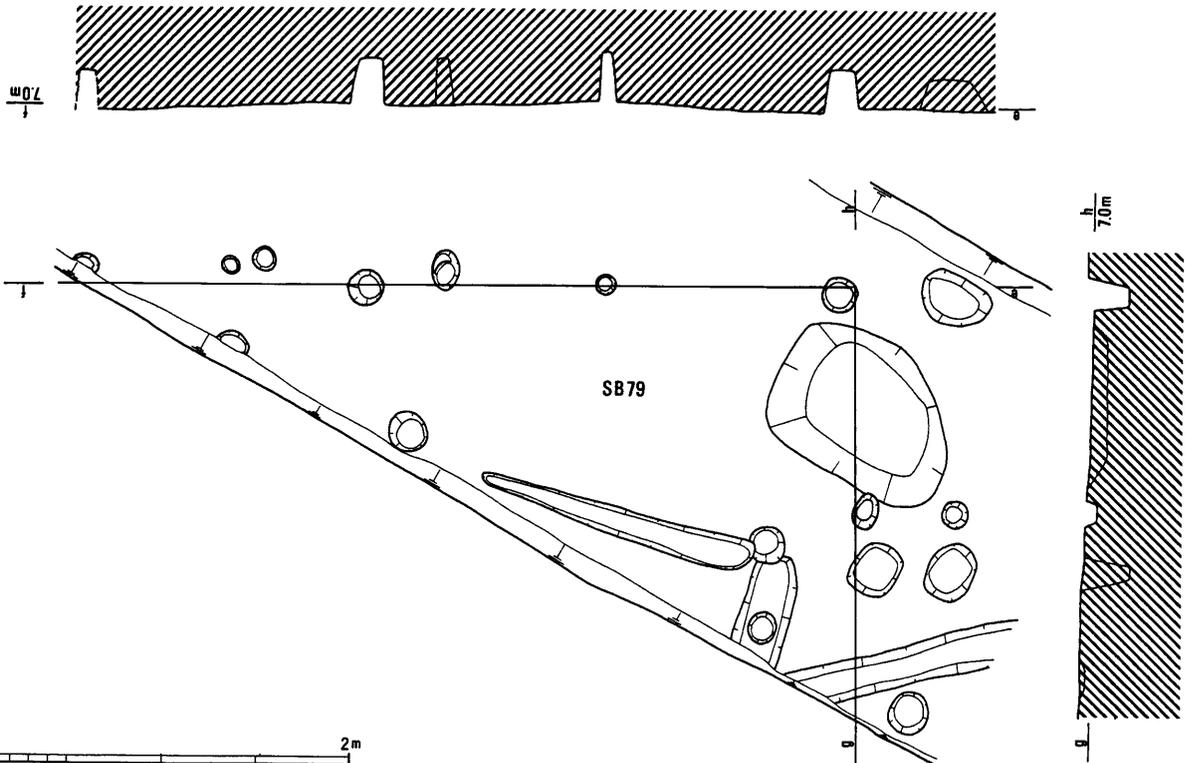
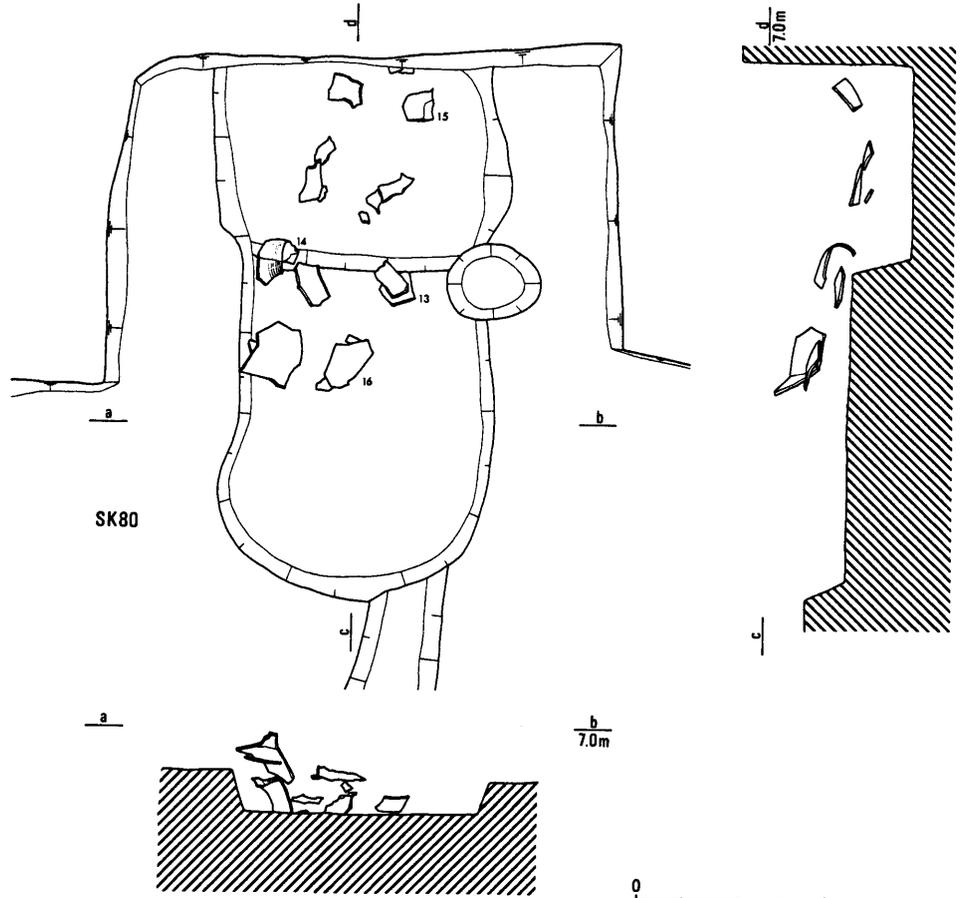
ピットからの出土遺物が小片のため時期は確定できないが、弥生時代のものとする。

土坑 SK80 (第6図) 調査区中央南寄りで検出した遺構である。西側が調査区外に続いており、全体の規模は不明である。検出できた範囲で観察すると、長楕円形を呈すると思われる。短軸は約0.7mである。また、西側で一段低くなっており、検出面からの深さは浅いところで約0.1m、深いところで約0.25mである。

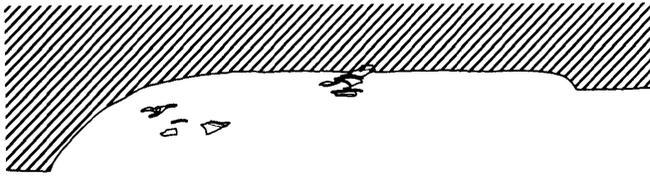
出土遺物は弥生時代中期の壺や甕(13~16)で、破片が多く図示できるものは少ない。

遺構番号	調査時	地 区	性 格	時 期	規 模 (m)	備 考
SK61	SK61	i 5	土坑	不明	深さ約0.05	須恵器甕片
SD62	SD62	g 6	溝	不明	幅約0.3、深さ約0.1	土師器小片
SK63	SK63	h6・h7・i6・i7	土坑	不明	長軸約2.0×短軸約1.2×深さ0.3	土師器小片
SK64	SK64	g 7	土坑	不明	深さ約0.1	陶器小片
SD65	SD65	g 7	溝	不明	幅約0.5×深さ約0.1	弥生土器・土師器小片
SZ66	SZ66	d7・e7ほか	攪乱			
SD67	SD67	d11・d12ほか	溝	弥生時代中期	幅約1.7×深さ約0.3	
SD68	SD68	c13・d14	溝	弥生時代か?	幅約0.2×深さ約0.05	
SK69	SK69	c17・d17	土坑	弥生時代中期	長軸約3.1×短軸約1.4	埋土中に多量に炭化物を含む
SZ70	SZ70	c26・c27ほか	旧河道?	中世?		山茶碗など
SD71	SD71	c19	溝	弥生時代か?	幅約0.4	
SK72	SK72	d19	土坑	弥生時代中期	東西径約1.7×深さ約0.1	石鏃、弥生土器
SD73	SD73	c19・d19ほか	溝	弥生時代	幅約2.0×深さ約0.1	
SD74	SD74	c20・d20ほか	溝	弥生時代中期	幅約1.4	
SD75	SD75	c21・d21	溝	弥生時代か?	幅約0.5×深さ0.1	SD74とほぼ平行
SD76	SD76	c25・d24	溝	中世?	幅0.8×深さ約0.3	磨製石斧、山茶碗、弥生土器など
SD77	SD77	c25・d25	溝	弥生時代	幅0.3×深さ0.1	SD76に切られる
SK78	SK78	d25	土坑	弥生時代中期		埋土に炭化物を含む。石鏃
SB79	SB79	c17・c18ほか	掘立柱建物	弥生時代か?		東西棟 N76°W
SK80	SK80	c24	土坑	弥生時代中期	短軸約0.8	埋土に炭化物を含む
SD81	SD81	c24	溝	弥生時代か?	幅約0.2	

第1表 遺構一覧表

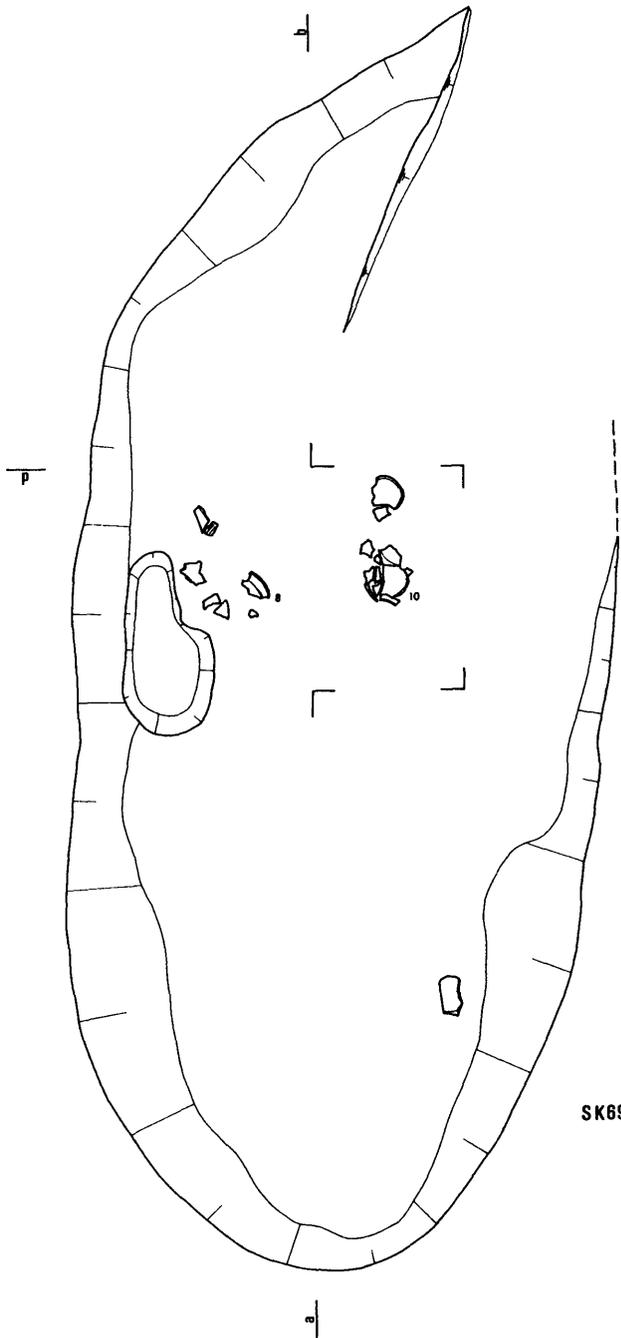


第6図 SK80・SB79実測図 (1 : 40)



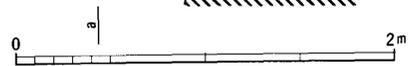
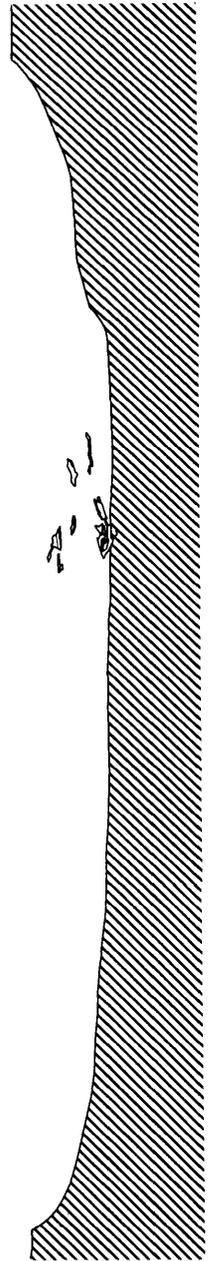
$\frac{1.2m}{d}$

c



SK69

$\frac{7.2m}{b}$



第7図 SK69実測図 (1 : 40)

IV 調査の成果～出土遺物～

今回の調査によって出土した遺物は、整理箱にして約11箱である。時期的には弥生時代中期のものが中心である。このほかに少量ではあるが中世の遺物もある。

以下、出土遺物を報告書番号順に記述する。個々の遺物の詳細については、石器観察表・遺物観察表を参照されたい。

a 石器（1～4）

1・2は石鏃である。1は側縁が直線的で、平面形が二等辺三角形になるものである。両脚を欠いている。2は基部が平基をなすものである。腹面の二次調整は縁辺部のみである。先端を欠く。

3は楔形石器である。1～3の石材はサヌカイトである。

4は磨製石斧である。偏平片刃石斧であろう。石材は緑泥片岩であると思われる。

b 弥生土器（5～25）

今回の調査で出土した弥生土器は、中期前葉の甕や壺がほとんどであり、高杯などは見られなかった。また、壺に施されている横線文はほぼ櫛状工具によるものであると思われるが、中には二枚貝腹縁による

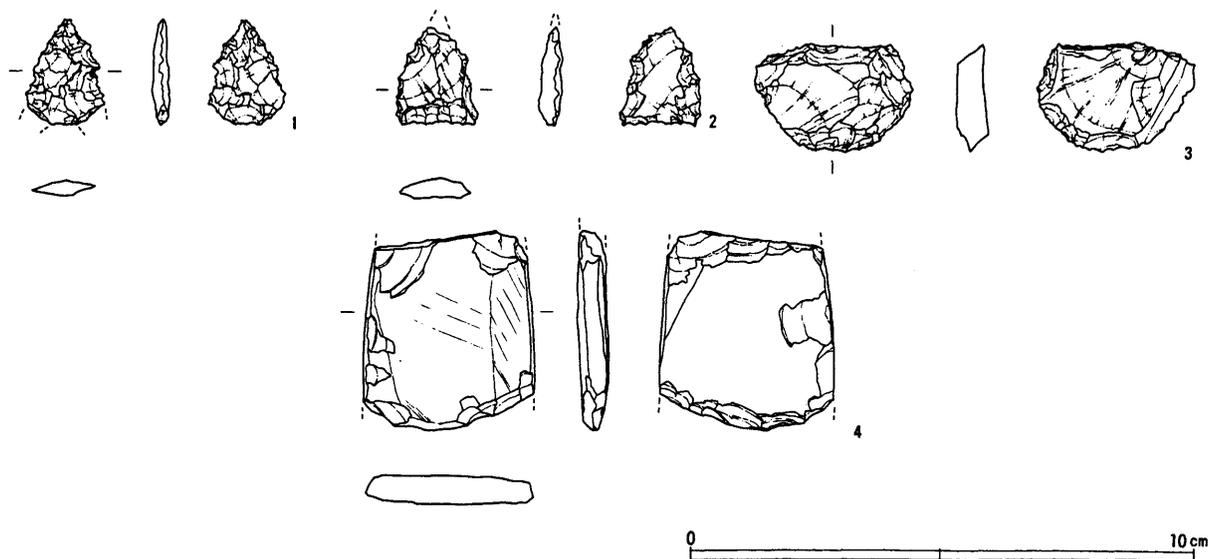
横線文と判断ができないものもある。全体的に磨滅が激しいものが多い。また胎土は白っぽく、3～4 mm 程度の砂粒が目立つ。雲母片も個々の土器によって量の多少はあるが全般に含まれている。

SD74出土遺物（5～7） 5は壺である。頸部が長くほぼまっすぐ立ち上がり、口縁部が大きく開く。口唇部には櫛状工具によるキザミを施す。頸部には横線文を施す。施文原体は異なる。6・7は壺の底部であると思われる。6は外面の1/3ほどが黒変している。

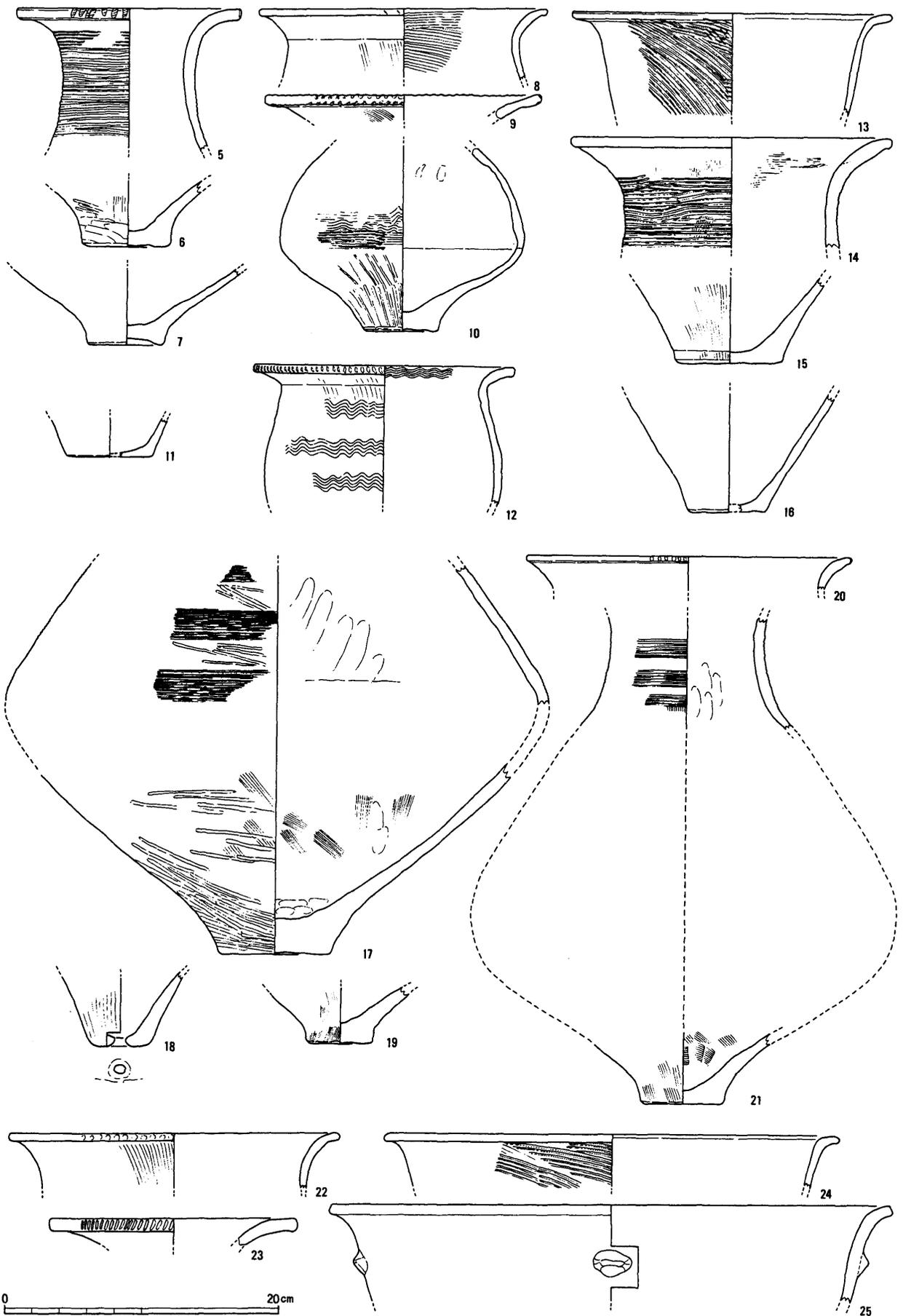
SK69出土遺物（8～10） 8は甕である。口縁部がゆるやかに外反する。内面に横方向のハケメを施す。胎土に雲母片が目立つ。9・10は壺である。9は口唇部に2方向からキザミを施す。外面にはかろうじてハケメが観察できる。10は体部外面に櫛状工具による波状文と横線文が施される。1/3ほどに黒斑がある。

SD81出土遺物（11） 11は甕の底部であると思われる。磨滅が激しいので断定はできないが、底部に穿孔がある可能性もある。

SK78出土遺物（12） 12は甕である。体部外面に



第8図 出土遺物実測図（石器）（2：3）



第9图 出土遺物実測図(土器)(1:4)

番号	登録番号	器種	出土位置 遺構	石材	残存状況	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	備考
1	008-01	石鏃	d 25 SK78	サヌカイト	一部欠損	(2.10)	(1.55)	0.35	(0.9)	
2	008-02	石鏃	d 19 SK72	サヌカイト	一部欠損	(1.95)	1.65	0.45	(1.3)	
3	009-01	楔形石器	d 20 包含層	サヌカイト		2.15	3.15	0.60	5.2	
4	009-02	磨製石斧	c 25 S D76	緑泥片岩?		(4.00)	(3.45)	(0.65)	(15.8)	

第2表 出土遺物観察表 (石器)

番号	登録番号	器種	出土位置 遺構	計測値 (cm)			調整 (技法) の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考
				口径	器高	その他						
5	004-02	弥生土器 壺	c 21 SD74③	16.3		頸部径 9.6	外面:横線文・刺突 内面:ナデ	粗 (~4mmの砂粒 多く含)	並	にふい橙 7.5YR 6/4 7/4 にふい黄橙 10YR 6/3	1/10	
6	005-03	弥生土器 甕	d 20 SD74①			底径 6.4	外面:ハケメ・ナデ・オサエ 内面:オサエ・ナデ	粗 (~8mmの砂粒・ 雲母片多く含)	並	外面:灰黄褐 10YR 6/2 内面:にふい黄橙 10YR 7/4	底部 少し欠	
7	005-01	弥生土器 壺	d 20 SD74②			底径 5.5		粗 (~5.5mmの砂粒 多く含)	並	外面:にふい橙 7.5YR 7/4 内面:橙 7.5YR 7/6	底部 1/2強	磨滅のため調 整不明
8	006-04	弥生土器 甕	SK69③	21.0			外面:ハケメ・刺突 内面:ハケメ	粗 (~3mmの砂粒 多く含)	並	外面:にふい橙 7.5YR 6/4 内面:橙 2.5YR 6/6	1/8	
9	007-04	弥生土器 壺	c 17 SK69	20.0			外面:ハケ後ヨコナデ・刺突 内面:ヨコナデ	粗 (~4mmの砂粒 多く含)	並	にふい黄橙 10YR 7/2	1/8	
10	006-01	弥生土器 壺	SK69①			底径 5.4 体部径 17.6	外面:櫛描波状文・横線文・ミガ キ・ケズリ? 内面:オサエ	粗 (~4mmの砂粒 多く含)	並	にふい黄橙 10YR 7/2 黄灰 2.5Y 4/1	底部 完形	
11	006-05	弥生土器 甕	c 24 SD81			底径 6.2	外面:ナデ 内面:ナデ	粗 (~3mmの砂粒・ 雲母片多く含)	並	褐灰 10YR 4/1 灰黄褐 10YR 5/2	底部 1/3	
12	006-02	弥生土器 甕	d 25 SK78①	19.0			外面:櫛描波状文・ハケメ・刺突 内面:櫛描波状文	粗 (~1mmの砂粒 多く含)	並	にふい黄橙 10YR 7/2	1/4	外面磨滅激し い
13	004-03	弥生土器 甕	c 24 SK80⑥	23.4			外面:ハケメ 内面:ナデ	粗 (~3.5mmの 砂粒多く含)	並	にふい黄褐 10YR 5/3 灰褐 7.5YR 5/2	1/3	
14	004-01	弥生土器 壺	c 24 SK80③	23.4			外面:ハケ後櫛描横線文・ハケ後ナデ 内面:ハケ後ナデ	粗 (~3.5mmの 砂粒多く含)	並	にふい橙 7.5YR 7/4 6/4 にふい黄橙 10YR 7/3	1/3	
15	005-02	弥生土器 甕	c 24・25 SK80⑤			底径 7.8	外面:ハケ後ナデ・オサエ・ナデ 内面:ナデ	粗 (~5mmの砂粒・ 雲母片多く含)	並	外面:灰黄褐 10YR 6/2 内面:褐灰 7.5YR 5/1	底部 1/2強	
16	005-04	弥生土器 甕	c 24 SK80②			底径 5.8	外面:ミガキ? 内面:ナデ	粗 (~3mmの砂粒 多く含)	並	灰黄褐 10YR 6/2 5/2	底部 2/3	
17	001-01	弥生土器 壺	d 12 SD67②			底径 7.7~8.2	外面:櫛描横線文・ミガキ・ハケメ・ナデ 内面:ナデ・オサエ	やや粗 (~5mmの 砂粒多く含)	並	外面:橙 2.5YR 6/6 内面:暗灰 N 3/		
18	002-03	弥生土器 甕	c・d 12 SD67				外面:ハケメ? 内面:ナデ?	粗 (~6mmの砂粒 多く含)	並	外面:橙 7.5YR 7/6 内面:橙 5YR 6/6		底部 焼成後 穿孔
19	002-02	弥生土器 甕	d 12 SD67			底径 4.8	外面:ナデ・ハケメ 内面:ナデ	粗 (~3mmの砂粒 多く含)	並	外面:浅黄橙 7.5YR 7/3 内面:灰白 N 5/	底部 完存	
20	002-01	弥生土器 甕	d 12 SD67	23.8			ヨコナデ・刺突	粗 (~3mmの砂粒 多く含)	並	橙 5YR 7/6 灰 N 6/	1/12	
21	003-01	弥生土器 壺	d 11 SD67			底径 6.2	外面:櫛描横線文・ハケメ・ナデ 内面:ナデ・オサエ・ハケメ	粗 (~7mmの砂粒・ 雲母片含)	並	にふい黄橙 10YR 7/2	底部 完存	
22	006-03	弥生土器 甕	d 17 包含層	24.0			外面:ハケメ・刺突	粗 (~2mmの砂粒・ 雲母片多く含)	並	外面:オリーブ黒 5Y 3/1 内面:灰 5Y 6/1	1/8	
23	007-03	弥生土器 壺	d 17 包含層	18.0			外面:ヨコナデ・刺突 内面:ヨコナデ	粗 (~2mmの砂粒・ 雲母片多く含)	並	外面:灰黄褐 10YR 5/2 内面:褐灰 10YR 6/1	1/8	
24	007-02	弥生土器 甕	d 18 包含層	33.4			外面:ハケメ 内面:ナデ	粗 (~2mmの砂粒・ 雲母片含)	並	外面:にふい黄褐 10YR 5/3 内面:灰黄褐 10YR 6/2	1/8	
25	007-01	弥生土器 鉢	d 18 包含層	41.3			外面:貼付ナデ	粗 (~3.5mmの砂粒・ 雲母片含)	並	にふい黄橙 10YR 7/3	小片	磨滅激しい

第3表 出土遺物観察表 (土器)

〈遺物観察表凡例〉

遺物観察表については、以下のような方法によって表記している。

番号：図版に対応する番号である。

登録番号：実測図作成時の番号である。

器種：陶器・土師器などの区別と、見た目の器種を表記した。

出土位置・遺構：遺物が出土したグリッド番号などを表記した。

計測値：計測できる範囲で表記した。

調整 (技法) の特徴：おおそを表記した。

胎土：粗密を表記した。

焼成：良・並・不良の3段階で表記した。

色調：『新版標準土色帖』(小山正忠・竹原秀雄編 9版 1989)を基準にしている。

残存度：数値は分数で、数値で表せないものは「小片」とした。石器は言葉で表した。

かろうじて3段の波状文が観察できる。また口唇部にはキザミ、口縁部内面には波状文が施される。

SK80出土遺物（13～16） 13は甕である。明確な頸部を持たず、口縁部がゆるやかに外反する。口唇部にはキザミを、体部外面には斜め方向のハケメを施している。外面には煤が付着する。14は広口壺である。頸部がまっすぐ立ち上がり、口縁部が大きく開く形状である。頸部は太く、タテハケ後櫛状工具によって横線文を密に施す。胎土には雲母片を含む。15・16は甕の底部である。16は磨滅が激しいため、調整は不明瞭であるが、外面にミガキが観察できる。底部には穿孔がある可能性もある。

SD67出土遺物（17～21） 17は壺である。底部はほぼ完存しているが、体部は破片で、図上復元したものである。体部破片には櫛状工具による横線が3段確認できる。18は甕の、19は壺のそれぞれ底部で

ある。18は底部に焼成後穿孔を施している。21は壺である。頸部と底部は図上で復元した。頸部には櫛状工具による横線が巡っている。

包含層出土遺物（22～25） 22は甕である。口縁部がゆるやかに開く形状である。体部外面に縦方向のハケメ、口唇部にはキザミが施される。内外面には煤が付着する。23は壺の口縁部である。口唇部にはキザミが施される。24は甕の口縁部である。明確な頸部を持たずに口縁部となり、端部は横方向に強く開く形状である。外面には斜め方向のハケメを条痕状に施す。条痕文系の甕であると考えられる。磨滅が激しいため不明瞭ではあるが、口唇部にはキザミを施しているものと思われる。25は鉢である。口縁部がゆるやかに外反し、体部上位には瘤状突起が付く。不明瞭であるが、口唇部にはキザミがあるものと思われる。胎土には雲母片を含む。

V 調査のまとめ

今回の調査では、主に弥生時代中期前葉の遺構・遺物を検出した。以下に周辺遺跡の様子を概観し、調査のまとめとしたい。

惣作遺跡の周辺では、近年国道23号中勢道路建設や県営ほ場整備事業に伴い、発掘調査が行われてきている。

惣作遺跡の三泗川をはさんで東方には、替田遺跡が所在する。当遺跡では、弥生時代中期の竪穴住居や土坑が検出されている^③。

この替田遺跡の南には式ノ坪遺跡があり、平成9年度に調査が行われた。ここでは替田遺跡と同時期の竪穴住居や土坑が検出されている^⑤。

今回惣作遺跡の調査では前述した2遺跡のような集落跡は確認できなかったが、土坑に見られる特徴

や出土遺物などから、同時期に集落が存在した可能性が考えられる。

弥生時代前期に、納所遺跡がこの地域の拠点集落として成立し、古墳時代前期初頭まで存続する^⑥。周辺の沖積地においては、弥生時代前期段階での遺跡の広がりは見られない。これが、中期前半になると今回調査した惣作遺跡をはじめ、替田遺跡や式ノ坪遺跡、蔵田遺跡^⑦など納所遺跡近隣に集落が確認されるようになる。しかし、これらはあまり継続性がないようで、弥生時代中期後半から後期にかけて、再び納所遺跡に収斂してしまう。以上のように、安濃川流域における遺跡の広がりを考える上で、弥生時代中期前半が1つの画期として注目され、今後はその意義を考えていくことが必要である。

〔註・参考文献〕

- ① 水谷 豊『惣作遺跡（第1次）発掘調査報告』（三重県埋蔵文化財センター 2002年）
- ② 註①に同じ
- ③ 米山浩之『一般国道23号中勢道路建設事業に伴う位田遺跡発掘調査報告』（三重県埋蔵文化財センター 1999年）
- ④ 池端清行・水橋公恵「替田遺跡（第1次）」（『一般国道23号中勢道路 埋蔵文化財発掘調査概報Ⅸ』 三重県埋蔵文化財センター 1997年）
- 水橋公恵「替田遺跡（第2次）」（『一般国道23号中勢

道路 埋蔵文化財発掘調査概報Ⅹ』 三重県埋蔵文化財センター 1998年）

- ⑤ 池端清行ほか「式ノ坪遺跡」（『一般国道23号中勢道路 埋蔵文化財発掘調査概報Ⅹ』 三重県埋蔵文化財センター 1998年）
- ⑥ 吉水康夫『納所遺跡』（三重県教育委員会 1980年）
- ⑦ 米山浩之・宮田勝功『一般国道23号中勢道路（10工区）建設事業に伴う蔵田遺跡発掘調査報告』（三重県埋蔵文化財センター 1999年）



調査前風景（東から）



調査区全景（東から）

図版 2



調査前風景（東から）



調査区全景（西から）



SK69 遺物出土状況（西から）



SD74, SD75（西から）

図版 4



SD76, SK80ほか (西から)



SB79 (北から)

報 告 書 抄 録

ふりがな	そうさくいせき(だい2じ)はくつちようさほうこく							
書名	惣作遺跡(第2次)発掘調査報告							
副書名								
巻次								
シリーズ名	三重県埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	236							
編著者名	柴山圭子							
編集機関	三重県埋蔵文化財センター							
所在地	〒515-0325 三重県多気郡明和町竹川503 TEL 0596-52-1732							
発行年月日	2002年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
そうさくいせき 惣作遺跡	つしとのむら 津市殿村	24201	827	34° 43' 19"	136° 28' 26"	20001127 ~ 20010123	400	平成12年度二級河川 安濃川(三泗川工区) 基幹河川改修工事
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
惣作遺跡	集落跡	弥生時代中期		溝・土坑など		弥生土器 甕・壺 石鏃(サヌカイト) など		

平成 14(2002) 年 3 月に刊行されたものをもとに
平成 19(2007) 年 12 月にデジタル化しました。

三重県埋蔵文化財調査報告236

惣作遺跡（第 2 次）発掘調査報告

～ 三重県津市殿村所在 ～

2002 年 3 月

編集・発行 三重県埋蔵文化財センター

印刷 伊藤印刷株式会社
